

Ⅲ キリスト教思想史の諸問題

<前回> 啓蒙的近代とキリスト教

1. 聖俗革命（村上陽一郎）
2. 「近代科学」の自律化→啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）
代表例としてのラプラス
3. 宗教改革以降の教派的多元性の状況下での教派間対立→「政教分離」システム→宗教の私事化
4. 歴史主義と自然主義：近代的知の自然法的な超歴史的思惟、あるいは伝統的キリスト教の超自然主義からの離脱
5. 近代聖書学（前期講義を参照）：近代的知に適合した聖書解釈の方法論
自由主義神学、宗教史学派
8. 近代聖書学の方法論（歴史的批判的方法）における「方法的な人間中心主義」
伝統的なキリスト教信仰と聖書学的成果との齟齬。
9. 聖書学的歴史学的方法論と結びついた自由主義神学において、神学の議論は形而上学的な問題設定を離れ、神の問題を倫理との関わりで論じる傾向が顕著になる（神学の倫理化）。市民社会の倫理との適合。「神学の秘密は人間学である」（フォイエールバッハ）
10. 19世紀の動向に対する批判
 - ・ ヴァイス、シュヴァイツァーによる黙示的終末論の再発見
 - ・ 第一世界大戦後に、キリスト教神学固有の基礎を目指す弁証法神学の運動

第4講：近代世界とキリスト教

3 進化論論争をめぐって

<「宗教と科学」関係史のアウトライン>

未分化／調和	／分離・分裂／対立／無関係／新たな関係へ
分化／区別（専門化）／緊張	
古代	中世 近代初頭 啓蒙・19世紀 20世紀

これまで、「宗教と科学」関係史を古代から近代までたどってきたが、それをまとめれば、上のようなになる（時間は、左から右へ経過）。17世紀から18世紀にかけての聖俗革命によって、宗教と科学との関係理解は大きく変化することになり、19世紀のダーウィンの進化論の登場以降、宗教と科学についての「対立図式」の成立へと向かうことになる。

(1) 進化論の衝撃

1. 19世紀の自然神学：生命現象という最後の砦（？）
自然神学（デザインからの神の存在論証）は、18世紀の啓蒙主義の登場にもかかわらず

ず、19世紀の前半までは（ウィリアム・ペイリー）十分に説得性を保持していた。それは、以下の特徴を有する自然神学に代わる生物学的理論が登場していなかったからに他ならない。

- ・自然界における見事な秩序という証拠から神の存在を推論する

神の自然界の調和の創始者

- ・生物の環境への適応に関してもっとも信憑性のある説明を与えた

2. キリスト教的生命論：アリストテレスの生命論＋聖書の創造物語

近代初頭までのキリスト教的生命論は、古代から中世において形成定着した理論的枠組みの中で展開してきた。それは、創世記の創造物語とアリストテレスの自然学との組み合わせによるものであり、個体（生命体）を、形相（その個体の種を示す）と質料（個体化を物的基礎となる）から捉えるものである。問題は、アリストテレスの形相が、固定性を有している点にある。ここから、種は変化しないという帰結が生じる。こうした生命理解が、長い間、キリスト教世界において受容され続けることによって、キリスト教的生命論が種の不変性を本質的に含意するという見解が生まれた。

しかし、聖書の創造物語は、種の不変性の意味でも、可変性の意味でも解釈可能であり（物語的な解釈の多様性。以前に論じた「エデン神話」の性格を参照）、聖書の生命論と進化論は決して調停不可能であると考えすることはできない。

なお、ダーウィン自身、決して進化論以降、キリスト教に対する態度においては終始揺れ動いており、決して無神論を主張したわけではない。

3. ダーウィンの進化論は、生命の環境への適応についても、神なしに説明する可能性を提示した。それは、突然変異と自然淘汰（偶然と必然）との相互作用によって、多様な生命の見事な適応のメカニズムを説明したという点で画期的なものであり、これによって、ペイリーに至る自然神学の伝統は大きな区切りに達した（＝終焉？）と言えよう。

しかし、これは、現代宇宙論における「人間原理」をめぐる議論が示しているように、自然神学自体の終焉を意味しない。むしろ、自然神学は、キリスト教あるいはキリスト教思想と、諸科学・諸学問との対話可能性に関わる諸問題を扱う知的領域として再考される必要がある。

4. 19世紀のダーウィンの進化論の登場は、その後の多くの進化論論争を引き起こした。とくに、キリスト教神学との論争は現在も続く論争史を作り上げている。

しかし、19世紀から20世紀のかけでの初期の論争は、必ずしも実りあるものとはならなかった。むしろ、現時点から見れば、19世紀の進化論論争は、科学も宗教がそれぞれの範囲を逸脱して行った感情的応答と言わねばならないだろう。

- ・19世紀の進化論は十分に科学的か？

進化論が、科学の水準に達するには、数学的手法による遺伝学の進展、遺伝子の構造をめぐる分子生物学の登場を必要とした。したがって、19世紀の進化論は、啓蒙的な実証科学の基準から言えば、いまだ科学以前の水準に止まっており——この評価はごく最近の進化論にまで妥当し、いわゆるネオ・ダーウィニズムの議論のいくつかについても当てはまるように思われる——、キリスト教批判も、十分に論理的レベルからなされたというよりも、多分にイデオロギー的な批判という色彩が目立っている。進化論がイデオロギーとして機能したことは、社会ダーウィニズムの及ぼした影響か

ら明らかである。

・すでに指摘したように、進化論は神の否定を帰結するとは限らないし（原理主義への否定にはなるであろうが）、キリスト教的生命論を進化論と調和するものとして提示することはさほど困難ではない。中世以来のしばしばなされる第一次原因と第二次原因（直接的と間接的）の区別を導入すれば、神の摂理（第一次原因）と進化論（第二次原因の理論）とは、対立を回避できる。第一次原因としての神は第二次原因を通して働く。

むしろ、人間と他の生物との関係を、両者の連続性（第二創造物語）と人間の独自性（第一創造物語）の両面で理解するという点で、創造論と進化論とは一致していると解釈することも可能である。

5. 対立図式の社会学的説明

ウィルバーフォース伝説（1860年）の流布や、ドレイパー（『宗教と科学の闘争史』1874年）、ホワイト（『科学と宗教との闘争』1896年）の著書の出版に象徴されるような「科学と宗教の対立図式」は、1880年代以降、急速に広まり、定着してゆく。この現象については、通常イメージされる科学と宗教との対立が原因というよりも、別の社会的要因によって生み出されたという点が指摘されている。

それは、19世紀後半に、自立した専門家集団として登場しつつあった専門科学者の集団とそれまで生物学をリードしてきた聖職者兼科学者の集団との間の、つまり二つの知的エリート集団間の闘争である。この闘争において、進化論は重要な役割を演じることになる。

（2）現代神学と科学

6. 神学と科学との分離＝対立の原理的回避 → 無関係・無関心

進化論に象徴される近代科学との関係をめぐり、20世紀の神学の有力の流れは、科学と宗教との分離・区別を選択することになった。不毛な対立を回避し、本来の専門領域に専念するという方向付けである。宗教の純化（心の救いの問題に集中する宗教）。

つまり、本来、宗教の役割は科学とは異なっており、それぞれが固有の役割に専念すれば、無用な対立は回避できるはず、宗教と科学の間には、関係も対立も存在しない、対立は、宗教が擬似科学となり、科学が擬似宗教となる場所に生じる、という議論である。

7. そのために採られたのが、意味と事実との区別——宗教は人間の生きる意味・価値に関わり、科学は事実に関わる——、あるいは客観的真理と主体的真理（キルケゴール）の区別という論理である。たとえば、ブルトマンの聖書の実存論解釈あるいは非神話化（Entmythologisierung）はその典型である。

世界観と信仰との分離（聖書テキストの世界観的枠組みと信仰内容との分離）

聖書と科学の対立は、古代的世界観（黙示文学、グノーシス主義を含めた）と近代的世界観との対立に帰着できる。

8. 創造物語に表現されているのは、創造の善性と概念化された信仰内容であり、創造物語は、事実のレベルで、宇宙や人間の発生を論じているのではない（聖書は科学の教科書ではない）。大切なのは、人間には神によって与えられたそれぞれ固有の存在意味、

存在価値があるとの信仰、そして人間は他の存在者との関わりにおいて活かされて存在しているというメッセージである。

(3) 創造科学

9. 19世紀的な対立図式は、宗教と科学の区別・分離論によって、原理的には解決した。しかし、現実には様々な対立が残っている。
10. キリスト教サイドでの対立論の代表は、「創世記の創造物語こそが真の科学である」とする創造科学論者である。その議論は次の三点に集約できる。
 - ・聖書の不可謬性（この点で、キリスト教原理主義に属するとも言える）。
 - ・生物のすべての基本的類型（種）は神に創造されたものであり、不変。
 - ・世界規模の大洪水が実際に起こったこと（洪水地質学）。
11. 進化論裁判・反進化論運動：創造論者あるいは原理主義
 - ・進化論を公教育から排除する（両親の信仰に反している進化論を子供に学ばせない権利）。
 - ・進化論と創造論とを対等に教えることの要求（進化論は擬似科学である）。
 - ・学会・大学での活動とその世界規模における拡大。

(4) 分離・無関係から対話・再統合へ

12. 1970年代以降、思想的状況は大きく変化した。

近代科学技術の問題性が顕わになり、人類は大きな危機に直面していることが、無視できなくなり、宗教も科学も（宗教者も科学者も）、同じ問いに直面し、共通の課題を持っていることを意識せざるを得なくなった。

こうした状況を直視することによって、対立論や分離・無関係論では、もはや済ますことができない、新たな対話を模索することが必要であるとの議論が現在有力になりつつある。宗教と科学との対話論は、現代のキリスト教思想の主要テーマの一つである。
13. 区別の上にたった相互関係の確認

先に述べた意味・価値と事実の区別は重要であるが、しかし、事実に基づかない価値は十分な意味での価値ではなく、また事実の探究も一定の価値観に基づいていることに、留意しなければならない。人間の生きる現場において、意味と事実とは結びついているのであって、宗教も科学もそれを無視した抽象論に終始すべきではない。
14. ティリッヒの次元論、多次元的統一性としての生

この新しい関係構築の試みの一つとして、ティリッヒの次元論を取り上げることができる。そのポイントは以下の通りである。

 - ・人間は、意味や事実といった相互に区別された諸次元の統一性において生きている。その人間的生を現象学的に記述し、諸次元を取り出す
生の現象学 → 次元（例えば、時間の様態を手掛かりに）の区分
物質／生命／心／精神・歴史
 - ・諸次元は相互に還元不可能であり、かつ人間存在においては統合されている。これは還元主義に対する全体論と解することができる。

この有効性は、医療における治療法の多様性と相互関連性において確認できる。

病と治療、そして健康の次元論

- ・ 諸次元の現実化には、現代科学が示唆するような、順序がある。

物質の次元→生命の次元→心の次元→精神の次元

左の次元は、右の次元が現実化するための前提である。左の次元からの右の次元の現実化は、全体論的な創発性における新しい法則性の出現として記述できる。つまり、右の次元の法則性は左の次元には還元できない。

15. 宗教と科学は、人間精神の営みであるという点で、いずれも精神・歴史の次元の現象である。しかし、科学はこれらの諸次元の事実に側面をめぐり、宗教は、その意味、とくに精神・歴史の次元における人間の営みの価値を問う。人間精神において、宗教と科学とは関係性を有する。

16. 21世紀の宗教と科学の関係は、どうなるか。

可能性は三つある。

- ・ 19世紀的な対立図式に戻る。
- ・ 20世紀的な分離・無関係の図式を継続する。
- ・ 新しい関係構築、対話の構築を試みる。

これらのうちのどの可能性が、どれほどの支持を得て実現するかは、予測できないが、これは人類にとっては決して小さな選択ではないように思われる。

この点に関しては、次回からの生命、環境、情報をめぐる講義を参照のこと。

<参考文献>

1. リンドバーク／ナンバーズ編 『神と自然』 みすず書房
A・ハンター・デュプリー 「14 ダーウィン時代のキリスト教徒科学者共同体」
フレデリック・グレゴリー 「15 一九世紀プロテスタント神学に対するダーウィン進化説の影響」
ロナルド・L・ナンバーズ 「創造論者」
2. 池田清彦 『構造主義と進化論』海鳴社
3. 松永俊男 『ダーウィンの時代 科学と宗教』名古屋大学出版会
4. 八杉龍一編『ダーウィニズム論集』岩波文庫
5. マクグラス 『科学と宗教』教文館
6. ティリッヒ『キリスト教思想史II』（著作集別巻3）白水社
7. H・ツァールント『20世紀のプロテスタント神学（上）（下）』新教出版社
8. J・モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社
9. 森田雄三郎 『キリスト教の近代性』創文社
10. 深井智朗 『超越と実在——20世紀神学史における神認識の問題』創文社
11. 芦名定道 『宗教学のエッセンス』北樹出版
『自然神学再考』晃洋書房
12. P.C.デイヴィス 『宇宙はなぜあるのか——新しい物理学と神』岩波書店